

地域や保護者と共に、自ら率先して学ぶ生徒を育てる

東京都 鷹南学園 (三鷹市立第五中学校、中原小学校、東台小学校)

コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校である鷹南学園では、教師だけではなく、立場や年齢の異なるさまざまな地域の人々が多面的に生徒にかかわることにより、生徒の良い面や可能性を引き出し、主体的な学びにつなげようとしている。

背景

保護者や地域と共に小・中一貫校を運営

東京都三鷹市は2006年度から、地域住民や保護者が学校運営に参加するコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を進めてきた。市内7つの中学校の各学区を1つの「学園」とし、小・中一貫のカリキュラムで教育活動を行う。

第五中学校、中原小学校、東台小学校の3校で成る鷹南学園は09年に開園。9年間を第一期(小学1～4年生)「基礎・基本を練り

返して習熟を図る時期」、第二期(小学5年生～中学1年生)「基礎・基本を生かし、思考力・判断力・表現力をつける時期」、第三期(中学2～3年生)「基礎・基本を応用して、個性・能力を伸ばす時期」に分け、自ら学び、考え、問題解決できる子どもの育成を目指す。鷹南学園で教育活動推進の一翼を担うのが「コミュニティ・スクール委員会」(以下、CS委員会)だ(図1)。学識経験者、青少年対策委員会、交通安全対策委員会、地域子どもクラブ、PTA、おやじの会、住民協議会、地域協力者など学校や地域で活動を行う諸団体のメンバーと各校の校長を合わせ、計21人

図1 鷹南学園の組織体制



*学校の資料を基に編集部で作成

School Data

◎2009(平成21)年、中原小学校、東台小学校、第五中学校の3校から成るコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校として開園。保護者や地域住民と共に魅力ある学校づくりを目指している。



学園長◎白井千晴先生 中学校校長◎伊藤陽一郎先生

中学校生徒数◎373人 中学校学級数◎12学級

中学校所在地◎〒181-0004 東京都三鷹市新川1-7-20

中学校 TEL◎0422-45-3201

学園 URL◎<http://www.education.ne.jp/mitaka/takaminami/>

公開研究会◎2014年10月31日(金)

1人で学べる生徒を育てる

で構成されている。

CS委員会の役割は、各校の「学校運営協議会」のメンバーとして、学校の経営方針や教育計画、予算に関する協議・承認・評価、対外的な情報発信、地域や保護者の声の収集などだ。更に、ゲストティーチャーや学習ボランティアなど地域人材のコーディネート、3校合同の演奏会の主催、子どもが学園のことを考える「子ども熟議」の開催など、学園のパートナーとして幅広く活動する。

●保護者との連携の工夫

家ではどう子どもを支援しているか 全家庭にアンケートを実施

そのCS委員会が13年度に「鷹南っ子ジャンプアッププラン2013」（以下、鷹南プラン）を始めた。これは、「学園の教育方針」「育てたい子どもの姿」「身に付けてほしい力」を示し、それに対して「学校がやること」「家庭でやっていること」「地域でやること」を明確にした上で、学園が目指すべき教育を学校・地域・保護者で共有し、実践しようという試みだ（P.20図2）。

実施に際し、「育てたい子どもの姿」に沿って家庭でどのような取り組みをしているかを保護者が記入するアンケートを、全世帯を対象に実施した。鷹南プランを始めた背景について、小田切茂美CS委員会会長はこう話す。「本学園には3校共通の教育方針や育てた

い子どもの姿があり、その実現に向けてさまざまな取り組みを行ってきました。その内容は定期的に情報発信していますが、それだけではコミュニケーション・スクールの概念や学園全体の取り組みが、十分に保護者に浸透しているとはいえません。そこで、このアンケートを通じて、鷹南学園の教育方針を学校の取り組みと併せて分かりやすく提示し、保護者の意識を学園に向けたという思いがありました」

更に、各家庭の取り組みをまとめて紹介し、それぞれの家庭での取り組みに価値があることを報告書にして伝えることで、子育てに自信を持つきっかけにしてほしいというねらいもある。学園から一方的に情報発信するだけでなく、保護者を支援し、相互に協力することが結果的に学園の目指す児童・生徒像の育成につながると考えたのだ。

学校目標に対応した 家庭での支援の仕方を伝える

アンケート回収率は、小学校で7割、中学校では5割と、CS委員会の予想を上回る反応があった。

アンケートの結果から見えてきたのは、家庭でさまざまな試行錯誤をする保護者の姿だ。「地域の人に気持ちよくあいさつをする」「迷惑を掛けないようにマナーを守る」などの項目は、保護者は自信を持って取り組み一方で、子どもに合った学習法を考えたり、計



鷹南学園園長
三鷹市立中原小学校校長
白井千晴 ちしひ・ちほろ



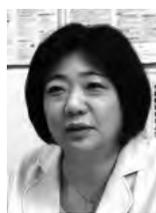
鷹南学園三鷹市立第五中学校校長
伊藤陽一郎 いとう・やういちろう
「自ら行動を起こし、出来ないことに
対して一生懸命努力できる生徒を育て
たい」



鷹南学園三鷹市立第五中学校
小川敦子 おがわ・あつこ
1学年担任。数学科担当。小・中一貫
コーディネーター。「皆が『分かった』
と思える授業を実践していきたい」



鷹南学園三鷹市立第五中学校
池田篤史 いけだ・あつし
1学年担任。英語科担当。研究主任。
「生徒の知的好奇心を喚起するような
授業を心掛けたい」



鷹南学園コミュニティ・スクール委
員会会長
小田切茂美 おだぎり・しげみ
「子どもにとって『辛口の友人』とし
て、長く学園にかかわってきたい」

画的に学習をすることをどうサポートすれば良いかについては、取り組みの難しさを感じている保護者が多かった。

白井千晴学園長は「自由記述式でしたが、多くの方が丁寧に答えてくれました。保護者が何を考え、家庭でどのように子どもとかかわっているか、その姿を捉えるのは学校だけでは難しい面があります。CS委員会からの

図2

「鷹南っ子ジャンプアッププラン 2013」(抜粋)

鷹南の方針	育てたい学園の子どもの姿	身に付けてほしい力	学校がやること	家庭でやっていること・やりたいこと ●多い回答、※特記	地域でやっていること● 取り組める可能性の案◆
確かな学力 勉強する 習慣を 身に付け、 自ら率先して 学ぶ力を 育てる	自ら学び、 考え、 発表できる子	自分からやる勉強 (計画的な学習)	問題解決型授業 に取り組み、 継続して学び 方や考え方、 表現力の育成 を図る	<ul style="list-style-type: none"> 自分できちんとやるようにする 自分で計画を立て工夫して学習時間を確保している 予習、復習をするよう働きかける 「勉強しなさい」と言わない。やる気をなくしてしまうので 通信媒体(インターネット、通信教育、ラジオ講座等)を使用して学習する 復習をするよう働きかける 塾に通わせる 学校の話をする 声をかける 親子の会話を通して自ら考える力をつける ※リビングで勉強させる ※親が勉強の様子を見て、教えたり声をかけたりする 	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティセンターのロビースペースを自習のために開放している(生徒同士で教えあいをしている) ○地域ボランティアによる放課後自習室の開設 ○丸池わくわくまつり、コミセンまつり、コミセン運動会、合同コンサートなど地域主催行事での発表の場の提供 ○中学生による小学生のための読み聞かせ活動(子どもクラブと中学校SSSの合同で) ◆地域協力者による学習指導ボランティアの配置 ◆先輩の声を届ける(チャレンジキャンプでの小一中交流会など) ◆社会人の声を届ける(アントレの第三者評価、職業人の話を聞く会への協力など) ◆地域の大人の知恵と力を提供する(人材バンク) ◆地域の大人が「楽しく」「がんばっている」姿を見せる ◆地域対象に漢検、数検、英検の実施
		自分に合った 学習方法			
自分の考えを持ち、 自分の意見で 話したり、 人の考えを 聞いたりする					
勉強する 習慣が 身に付いた子		家庭学習の習慣	<ul style="list-style-type: none"> 朝学習、朝読書、放課後学習の定着化を図る(鷹南スタンダードの確立) 家庭学習の習慣化を呼び掛ける 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日学習する時間を決めている 宿題やワークを毎日必ずする 朝学習をしてから登校する 計画を立てる テレビやゲームの時間を決めたり、約束を決めたりしている 予習・復習の習慣化を図る 図書館の活用を勧める ※親が自ら学習する姿勢を見せる ※親子で同じ本を読み、お互いの感想をいっしょに話す ※夜、家族全員で10～15分読書をする時間を持つ 	
		読書に親しむ習慣			

鷹南学園の3つの方針それぞれについて「育てたい学園の子どもの姿」などをまとめた。「地域でやっていること・やりたいこと」は今後検討する *学園資料から抜粋して編集部で作成

アンケートだからこそ、保護者は率直な意見を書いてくれたのではないかと思います」と語る。

小田切会長は、「小学校、中学校と学年が上がると共に、空欄が増えていく項目がありました。また、中学校では、回答欄にぎっしり書き込む保護者と、全く書いていない保護者の二極化が顕著でした」と分析する。

「ここから見えてくるのは、中学生に対する保護者のかかわり方の難しさです。小学校では毎日宿題が出され、内容もドリル的なものが多いため、保護者は支援しやすいのですが、中学校では、宿題以外に自分で予習・復習する姿勢が求められるようになっていきます。『復習しなさい』と声を掛けるものの、具体的にどのように支援すれば良いのか分からないという状況が見て取れました」(小田切会長)

CS委員会は、空欄は保護者からの「かわり方を教えてほしい」というサインと捉え、保護者に配布するアンケート結果をまとめた報告書に、家庭でよく行われていた取り組みと、C

S委員会です。特に印象に残った取り組みを抜粋して掲載した。報告書に載せきれなかった取り組みも、ホームページ上で紹介する予定だ。各校にもアンケート結果を伝え、家庭の実態に応じた宿題の出し方や、家庭学習方法をアドバイスするなど、自学自習を促す指導に役立ててもらいたいと考えている。

一方で、CS委員会としても、生徒の主体的な学びを支えるための取り組みに着手したいと小田切会長は語る。

「CS委員会を支えてくださる多くのサポータースタッフには、さまざまな社会経験を持つ人材が集まっています。その強みを生かし、自ら学び、考える力の基盤となる『人間力』を育むための取り組みが出来ないかと考えています」(小田切会長)

例えば、多くの保護者がかかわりが難しいと感じていた「新たな挑戦や失敗を恐れず一歩を踏み出す」力を育てるため、CS委員会主催の課外活動として異文化交流プログラムなどの試みが検討されている。学習面は学校が、その基盤となる人間力の育成はCS委員会が担うことで、子どもの主体的な学びを支えていこうとしている。

● 中学校での指導の工夫

「放課後自習室」で

地域の人が自習を支援

第五中学校では、鷹南プランに示された方

1人で学べる生徒を育てる

針に沿いながら、生徒を学びに向かわせるための独自の取り組みを行っている。

同校では、「自ら学習が出来るようになるには、授業内容をしっかり理解していることが前提」という考えの下、数学ではTT（チーム・ティーチング）、英語では習熟度別少数授業を行い、生徒一人ひとりの授業の理解度を高めることに重点を置く。英語科の池田篤史先生は「授業中も、つまづいている生徒には個別に対応しています。英語科では、毎日10行以上、教科書の英単語や英文を書く課題を出していますが、その取り組み状況も授業中に確認しながら進めています」と話す。

授業内容の理解を促す取り組みとして、生徒による定期考査の予想問題作成も行っている。これは、各クラスの教科系の生徒が、定期考査の出題範囲に従って予想問題を作成するというものだ。教科係は必ずしもその教科が得意な生徒が務めるわけではないが、予想問題はクラスの生徒全員に配布するので、手を抜かず作成するという。

数学科の小川敦子先生は、「良い予想問題を作ると他の生徒から褒められるので、そのうれしさが主体的な学習につながっています。予想問題の作成には、教科書やノートを読み込み、しっかり学習する必要があるのです。担当した教科についてはテストの得点が高くなる傾向が見られます。家庭学習の方法も身に付き、良い結果を出せることが、次の学習

への動機にもなっているのではないでしょうか」と語る。もちろん、予想問題を解くことが、本番のテスト結果にもつながることを、生徒たちは実感しているようだ。

これらの取り組みに加え、10年度からは、保護者の発案により「放課後自習室」を設けている。部活動の定休日が多い水曜日に、自習室として教室を開放するもので、定期考査前は週3日実施する。自習を支援するのは、保護者や地域住民の有志から成るスクールサポートスタッフ（SSS）だ。主に学習支援、課外活動支援、学校支援（環境整備）を担っており、13年度の登録者は約140人。「放課後自習室」では、2〜3人が安全管理者として見守り役を担当する。出席する生徒数は時期によりまちまちだが、毎回出席する生徒もいる。自習室が生徒にとって安心できる居場所となっており、それが自学自習の習慣に結び付いているのだろう。

第五中学校の伊藤陽一郎校長は、学校にさまざまな地域の人々が入ることで、生徒の学ぶ意欲につながると感じている。

「教師でも保護者でもない、第三者的な立場の方と触れ合うことは、生徒の視野を広げる良い機会になっています。本校では、『放課後自習室』以外にも、SSSに授業の支援してもらったり、生徒が地域の行事に参加するなど、地域の方々や触れ合う機会があります。さまざまな経験や出会いをする中

で、自分の良い面や可能性に気付き、目標や夢が出来て、主体的に学ぶ姿勢にもつながっているのではないのでしょうか。教育は人が行うものです。その『人』に地域のさまざまな方が入っていることは、子どもの学ぶ意欲を支える大きな力になっていると感じます」

●今後の課題

学園の取り組みを「見える化」し、家庭での支援につなげる

今後は、鷹南プランでの保護者アンケートの結果も踏まえて、現状では未定になっている「地域でやること」も具体的に決めていく予定だ。CS委員会で検討されている異文化交流などの取り組みや、おやじの会や子どもクラブなどの地域の諸団体の取り組みも「地域でやること」に組み入れられる。この欄が埋まれば、学校、保護者、地域住民が参加する「鷹南学園」の教育の全体図が「見える化」され、教育活動の活性化が期待される。白井学園長は次のように語る。

「地域には家庭に課題を抱える子どもも多いため、家庭学習に学習の全てを委ねることは出来ません。だからこそ、取り組みを『見える化』し、『地域住民も支えていくから、保護者も一緒に頑張りましょう』とアピールしていくことが大切だと考えます。これからも、学校、保護者、地域の三輪で子どもの主体的な学びを支えていきたいと思えます」